

東京 IPO 特別コラム

2016年3月8日 Vol.18

リンクバル(6046)のストップ高が意味するところ

なす術もなく値下がり傾向を続けてきた新興市場銘柄、とりわけ昨年 IPO して直後は人気化してもその後、長期間放置され続け、株価が高値から2分の1、3分の1になった銘柄の行方が気になるところです。通常値下がりするのは業績が期待に反して悪かったからというのが通常で、好業績をアピールできる銘柄はハウドゥ(3457)のように右肩上がりの展開が見られます。株価の上昇には安心して投資できる条件が求められます。事業の内容がわかりにくい銘柄に投資するのに何もわざわざ業績の悪い銘柄に投資する必要はないのであって、そこは投資家の目線で選択された銘柄が買われることは妥当です。ただ、買われ過ぎの局面と同様に、売られ過ぎ局面では投資家のチャンスが待っています。とりわけ、業績の悪化ないし想定を下回ったとする点で売られている銘柄は、その内容を吟味して一過性なのか、次期決算はどうなのか、ビジネスモデルが壊れていないのかなどを吟味してみて現状の株価水準が企業価値を逸脱した評価がなされていると判断される場合は思い切った投資をするチャンスとみなすこともできると考えられます。一方通行になりがちな新興小型株市場ですが、そうした性質を利用して相応の資金力を持ち合わせている投資家であれば、ここぞという株価水準では積極的に買い始める可能性もあります。

本コラムで取り上げてきた銘柄でも先週は街コンや街バル事業を展開するリンクバル(6046)がストップ高を演じていますが、売られ過ぎの修正とみなされます。値下がり傾向にある銘柄ではよく半値8掛け2引ききまで売られるという言い方がされますが、同社株もまさに昨年5月の高値3400円から今月1日の安値701円まで9か月余りで5分の1近くまで売られての反転上昇です。この間に業績の下方修正があったとかいう話ではなく、今期の業績が先行投資で伸び悩んだように見えるだけで、特段ビジネスの潮流に変化はなくむしろ仕掛けがたくさんあって、それが同社のWEBサイトにも確認することができます。それよりも既に東京 IPO スタッフが取材したコメントをご覧頂くとわかるように同社を率いる社長の良さが挙げられます。50万人ともいわれる会員向けのアプリ開発が進捗していけば将来の飯の種になっていくという話を投資家は認識すべきで、株価のトレンドだけで企業をネガティブに評価すべきではないというのが本コラムで筆者が主張したい点です。

こうした銘柄はほかにもたくさん出てくると見られます。一方通行になりがちな新興市場銘柄への取り組みはなかなか難しいかも知れませんが、セミナーなどを通じて企業の動向をしっかりと見極め、そこにポジティブな評価点を見出せたならリスク分散に心がけながらご投資をして頂くことが肝要かと思えます。

(東京 IPO コラムニスト 松尾範久)